



## 九州の先端産業は地域福祉

糸乗 貞喜

(よかネットNO.6 1993.11)

— 1 地域産業

21世紀の九州の基幹産業を占うために、次のことを考えてみたい。

何時の時代でも、多くの人々に喜ばれ、必要とされることがベースとなってきている。

次の時代の社会構造を予測して、ニーズの母体を見つけることが、先端産業さがしのもとになる。

時代の流れを見つめて、動的な地域産業構造モデルで考えてみる。

地域の将来を考えるための新しい産業分類を考えて、の地域社会モデルと合わせて、地域の長所、短所、構造的課題などを見つけ出し、地域産業政策の方向を見つける。

上記の方向付けによって、九州の先端産業は、気候、風土、人柄を活かした広い意味の地域福祉産業であると思う。福祉といっても老人、身障者といった考え方ではなく、心の障害者、心の障害の予防をしたい人、ちょっと心にゆとりをもちたい人など対象を広く考える。また、それにかかわる製造業として、老人、身障者などのための生活環境や機器のみならず、広い範囲の人たちのための旅、遊び、健康回復施設など多様にわたると考えられる。

### 21世紀に最も喜ばれること

山本周五郎の書いた『しゃべりすぎる』という小説がある。二人の武士が出てくるのであるが、その一方はいつもニコニコしてほとんど口をきかず、極めつきの聞き手上手ということであるが、一方は無口の武士に対して「うん、貴公はしゃべりすぎるから」といいながらしゃべり続け、一段落すると「うん、いや、だまっておれ、貴公はしゃべりすぎるからな」といいながら、自分は切れ間なしに話を続ける、といった内容である。もちろんストーリーはあるわけだが、周五郎の言いたかった気持ちは、言葉を出さない雄弁とか、聞き上手の達弁といったことではなかったのかと思う。会話の原点は気持ちの通い合うことだという結論だったのではないかと思う。ミヒヤエル・エンデ作の『モモ』の場合も、彼女のもっている「すばらしい才能」は「相手の話を聞くこと」で、「彼女はただじっと座って注意深く聞いているだけ」で、その大きな黒い目は、相手をじっと見つめているだけなのだが、相手は希望と明るさがわき、勇気がでてくるということになる。結局これは会話というものは気持ちの充実が大切で、音を出さず、声を出さずという形式ではないということの主張であると思う。

本論にもどすと、21世紀に最も喜ばれる仕事というのは「会って話し相手になってあげる」ということになるのではないのかと思う。話をしてもらうことを録音してあるテープで代用することや、聞いてもらうためにテープを置いてそれを相手ににしゃべれと言っても、テープレコーダーは心を持ってないし、相づちを打つてくれないし、気持ちの表現もしない。留守番電話に、思いを込めて話し込むということができないのと同じである。

21世紀に喜ばれそうなことを、さらにあげてみると「電話をかけて話し相手になること」「手紙をあげること」「心のこもった土産をあげること」などが浮かぶ。親しい人と一緒に、仕事のために小さな街へ行った時のことであるが、その人が急に駅前の菓子店（その土地で有名な）へ入って宅急便で送っていたので不思議に思って聞いてみた。「いや、私の道楽でしてね。家の近くに少年施設があるので菓子を送る事にしているのですよ。たまにハガキで礼状が来て『子供は甘いのが好きなのですが、そういうものを買ってやるのができないので、助かっております』などと書いてあると嬉しいんですよ」という話であった。ボランティアは、結局自分のためにやるのだということを実に示す例だと思う。つまり「自分のた

	a. 総人口 (千人)	b. 単身世帯数	c. b/a × 100
1960 (S35)	4,007	31,991	0.8
1965 (S40)	3,965	62,007	1.6
1970 (S45)	4,027	98,722	2.5
1975 (S50)	4,293	155,834	3.6
1980 (S55)	4,553	225,466	5.0
1985 (S60)	4,719	325,119	6.9
1990 (H2)	4,811	393,846	8.2

図表1 福岡県における単身世帯の増加(資料:「国勢調査」)

めでありながら、他人に一寸抑制のきいたお節介が出来る」というところである。

次世代の先端産業は買い手が決める

先端産業という言葉が変な使われ方をしている。「先端産業を導入して地域の活性化を図ろうとして工業団地をつくったのですが、バブルがはじけて企業誘致が思うように進まず困っているのです」というような話をする市役所の人がいる。先端産業というのは、そもそもバブルに関係のないものだったのではないかと思う。“21世紀に喜ばれること”について先に述べたが、その背景にある“個族化現象”について考えてみたい。身近な例で説明するために福岡県の数値を示してみる。福岡県の人口が400万人を超えたのは1960(S35)年であるが、当時の単身世帯(1人暮らし)は3万余りで、全人口の0.8%にすぎなかった。ところが10年後の1970年には、総人口はそれほど変わっていないにもかかわらず、3倍強の9.8万人になり、2.5%になった。平成2年の国勢調査では総人口が4,811千人、単身世帯が394千人(うち65才以上高齢単身のみで76,950世帯)、比率にして8.2%となっている。

日本の社会は戦後50年ほどの間に、集落や町内会、隣組といった社会集団、その構成単位であった家族が崩壊し、核家族でさえもない一世代家族や個族の多い社会となっている。表に示したのは、そのうちの単身世帯だが、“個族化”の動きが急激に大きくなっていることを示している。

高齢化社会という言葉が呪文のように唱えられているが、真の問題は世代間の情報・知恵の受け継ぎ欠陥にどう対処するかということであろう。

こういう社会構造の中で需要が大きくなるものは、「思いやり」と同時に、個人の「主体性の尊重」である。先頃、週刊誌のグラビアを見ていたら、女性隊員が防衛大学を入学後すぐ辞めた理由として、「私は今までほめられ型の教育しか受け

てこなかったので、プライバシーを無視され、怒鳴られることに耐えられなかった」という言葉が出ていた。戦争や戦術の訓練にプライバシーがあると考えすることは、社会集団へかかわるための知恵の欠如を示している。これは18才までの教育が、「思いやり」でなく「その場しのぎのことなかれ」主義であり、「主体性の無視」に終始していた結果の現れである。

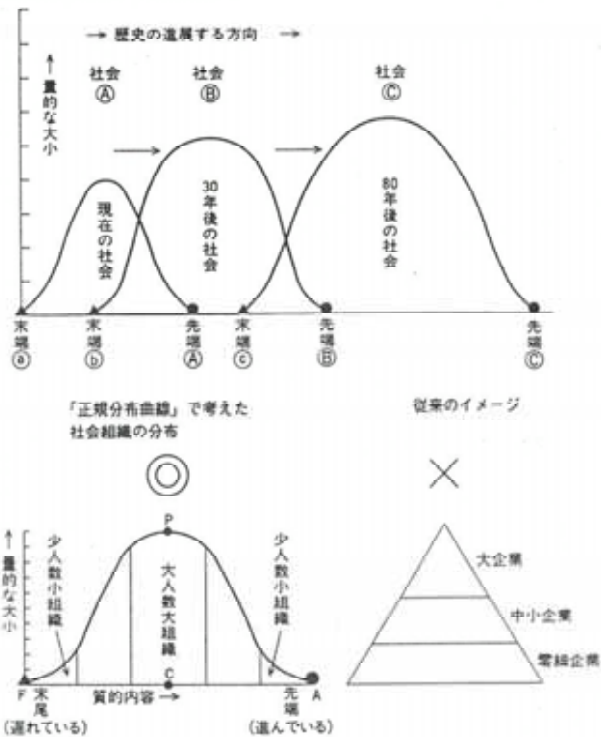
これらの潜在需要に対して、ボランティアとビジネスの組み合わせによる「地域福祉」が必要になっている。つまり高齢、身障者などに対する福祉はもちろんのことであるが、それに上記のニーズが上乘せされることとなる。

動的な産業構造モデルで考えてみる

テクノポリス計画の頃から、“先端産業”という言葉が広く使われだしたのであるが、当時私は「先端産業を、せまい範囲に決めつけるのはどうか……」とあってある県庁の人にひどく軽蔑されたことがある。つまり「先端産業はICT産業のことで、21世紀の日本をきりひらく産業だが、これの誘致が地域の将来を決めるといわれているのに、その程度の勉強もしていないのか」といってお叱りをうけたわけである。

当時から「先端産業という産業はない。どんな産業でも業種でも企業でも先端もあれば中間もある。それはいつの時代でも常に入れかわっているものだ」ということをある先生から常々教えていただいていたのに、通産省の文書にのっているという理由で先端産業を限定し、さらに相手を馬鹿にするということまで行われていた。

この問題は固定的に考えるのではなく、動的にうけとめるべきことだと思うので、それにふさわしい産業構造モデル(飯沼和正氏の提唱によるもの)で考えてみたい。次頁図表2に示すように、歴史の進展の中で先頭に立つ部隊は量的には少なく、量的に社会を支える部分は集団単位も集団数



図表2 産業構造モデル(飯沼和正氏提唱)

も多くなると考えられる。この飯沼モデルで言うと、小組織創造活動セクターがその地域にふさわしいだけ存在し、それが十分活動的である地域は、将来が明るいと言ってよいことになる。

しかし、ある一時期に先端であっても何年か経つともはや先端ではなくなる。つまりこの先端部分を常にリニューアルするシステムのない地域は停滞するということでもある。その概念を示したのが上図である。

以上、三点にわたって述べてきたが、まえがきの、に述べているように、少し実証してみる必要がある。なお、飯沼モデルについては飯沼氏の各著書及び当所の「地域における文化・科学技術の推進」を参照していただきたい。